

環境動態学専攻のこの一年

伴 修平

環境動態学専攻長

2013年度もつつがなく終えることができました。私も任期を全うできて一安心です。今年度はディプロマポリシーとカリキュラムポリシーを作成いたしました。シラバスも詳細に記述されるようになり、様々なことに透明性が求められる時代となってきたようです。システムティックになって、分かり易くなるのは良いことですが、創造性が欠落してゆきそうで若干の不安を覚えます。

さて、本年度も環境動態学専攻における学生の出入りは比較的順調でした。博士前期課程修了者は20名、博士後期課程修了者は1名で、後期課程は昨年に引き続き課程内での学位取得でした。一方で、博士前期課程への入学者は15名と募集人員を3名下回る結果となりましたが、博士後期課程へは3名が入学いたしました。

教員にも若干の入れ替わりがありました。昨年4月からは泉津助教、そして11月からは飯村助教をそれぞれ迎えることができました。そして、4月からは高倉准教授を新たに迎えることになります。若い人材の補給は組織の新陳代謝には欠かせません。今後のご活躍に期待いたします。一方、この3月には沢田教授を送り出すことになりましたが、沢田教授は、ご退職後も科研費の研究でインドネシアとの共同研究に従事されとのことでした。こちらもさらなるご活躍をお祈り申し上げます。

本学では、昨年度から4つの拠点研究を設定し、これを中核とした学内外での共同研究体制を充実させてゆくことを決めました。本専攻の教員が中心となって推進するのは、「琵琶湖モデル構築に関する研究」で、1) 琵琶湖から得られる持続可能な資源を利用した環境保全と里湖循環型社会の構築（研究代表者、伴 修平）、2) 琵琶湖への大気由来降下物のフラックスと湖沼生態系への影響評価（研究代表者、永淵 修）、3) 温暖化時代に対応した次世代型琵琶湖環境モニタリングシステムの構築（研究代表者、後藤直成）、の3つの研究課題を提案しております。1) については、大量繁茂で迷惑ものになっている琵琶湖南湖の水草をメタン発酵で処理し、発酵消化液中に含まれる栄養塩を微細藻類バイオマスに転換することで水草バイオマスを循環利用するための基礎技術を開発するプロジェクトとして環境省の資金を得ることができ、来年度より3年計画で実

施する運びとなりました。2) については永淵教授によって引き続き継続して研究が行われています。残る一つも来年度には研究資金を得て実際の研究が始まることを期待したいところです。少しでも関連する分野の方は研究代表者にご連絡頂き、共同研究を推進していただくようお願いいたします。